SHOW-HEYシネマルーム

★★★★

ウェイバック　ー脱出６５００ｋｍー

2010年・アメリカ、アラブ首長国連邦、ポーランド映画
配給／ショウゲート・134分

2012（平成24）年10月11日鑑賞　テアトル梅田

Data

監督・脚本・製作：ピーター・ウィアー
原案：スラヴォミール・ラウイッツ『脱出記ーシベリアからインドまで歩いた男たち』（ビレッジブックス刊）
出演：ジム・スタージェス／エド・ハリス／シアーシャ・ローナン／コリン・ファレル／マーク・ストロング／グスタフ・スカルスガルド／アレクサンドル・ポトチェアン

みどころ

『人間の條件』の梶上等兵による愛妻・美千子を求めてのシベリアから日本への脱出行はならなかったが、ポーランド兵のヤヌシュは・・・？邦題の６５００ｋｍはシベリアーバイカル湖ーモンゴルー万里の長城ーゴビ砂漠ーチベットーインドだが、徒歩だけでそんな旅がホントに実現できるの？チラシには「真実の物語」とうたっているが、さて・・・。

ナチス・ドイツとソ連に分割占領されたポーランドの悲劇は、『カティンの森』（０７年）だけではなく、こんなところにも！チベットを含めてしっかり「あの戦争」後の歴史の勉強をしなければ・・・。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■ホントに「真実の物語」？それがどうも・・・■□■

本作のチラシには「原案は、第二次世界大戦下、シベリアの矯正労働収容所から仲間達とともに脱出し１年余りかけ６５００ｋｍを踏破した実在のポーランド人兵士、スラヴォミール・ラウイッツの真実の物語」と書いてある。しかも、その６５００ｋｍとは「シベリアからモンゴル、ゴビ砂漠、チベット、ヒラマヤを越えインドへ―」とあるから、ついホンマかいな？と思ってしまう。そこで、ウィキペディアのインターネット資料を調べてみると、たしかに本作はシベリアのグラグを逃れ、自由を求めてインドまで４０００マイルを歩いたとするスラヴォミール・ラウイッツの『脱出記ーシベリアからインドまで歩いた男たち』に大まかにもとづいている、らしい。しかし、

①２００６年にＢＢＣがラウイッツ自身によるものを含むさまざまな記録を検証した報告によると、ラウイッツは実際には１９４２年、ソ連によって釈放されていたらしい。また

②２００９年５月には第２次世界大戦で戦ったイギリスに住むポーランド人ヴィトルド・グリンスキが、物語は真実であるが、ただしそれは彼の身に起きたことであると申し出た。しかし、グリンスキの主張には数多くの疑問が呈されているらしい。さらに

③１９４２年にシベリアのグラグから逃れた一団がインドにたどり着いたと言われているが、これにもまた疑いが示されているらしい。なるほど、なるほど・・・。

そうだとすれば、ピーター・ウィアー監督自身も、脱出の出来事は実際にあったと主張しながらも、映画そのものは「本質的にはフィクション」であると述べているそうだから、「真実の物語」は少し誇大宣伝なのでは・・・。

■□■あの時ポーランドは？本作の主人公は？■□■

本作の主人公はポーランド人兵士のヤヌシュ（ジム・スタージェス）。１９３９年９月１日に西からナチス・ドイツの侵攻を受けたポーランドは、その後９月１７日には東からもソ連の侵攻を受けたから大変。西からヒトラー率いるナチス・ドイツ、東からスターリン率いる共産ソ連軍の侵攻を受けたポーランドは結局東西に分けられ、西はドイツに、東はソ連軍に占領されることになった。そこから生まれた悲劇は、アンジェイ・ワイダ監督の『カティンの森』（０７年）を観ればよくわかる（『シネマルーム２４』４４頁参照）。

本作は、そんな歴史的な事実の中で、ソ連軍に捕えられ、妻の証言によってコミュニストのスパイとされたヤヌシュが、シベリアの矯正労働収容所に送られるところからスタートする。しかして、本作のメインストーリーはこのヤヌシュが、拷問によって偽りの証言を強いられた妻に対して、自分は妻を許していることを伝えるため、矯正労働収容所を数名の友人（？）と共に脱出し、苦難の末、インドへの６５００ｋｍの踏破を成功させるもの。そしてポーランドの民主化がなった後、ポーランドへの帰国を実現させ、妻との再会を果たしたという後日談が語られるわけだが、さてその遠い遠い道のりは？

■□■なぜ英語が共通語に・・・？■□■

シベリアの矯正労働収容所へ送られたヤヌシュが最初に心を許し友達になる（？）のは、俳優で貴族の役をやったために収容された男、カバロフ（マーク・ストロング）。ピーター・ウィアー監督は劣悪な環境の収容所の中に、ロシア人の極悪犯罪者ヴァルカ（コリン・ファレル）、アメリカ人で技師のミスター・スミス（エド・ハリス）、ケーキ職人で絵が上手なトマシュ（アレクサンドル・ポトチェアン）など多士済々の人物がいることを、興味深いエピソードの中で描いていく。

ここで私が違和感を覚えたのは、ポーランド人のヤヌシュが英語を雄弁にしゃべるうえ、収容所の中で英語を学んだというロシア人のヴァルカでさえ、英語をしゃべること。五味川純平原作の『人間の條件』全６部作の後半では、ソ連の強制収容所に入れられた梶上等兵が言葉の壁に悩む姿が描かれていた（『シネマルーム８』３１３頁参照）。それまでの軍国ニッポンから共産ソ連と華麗に変身したロシア語の通訳ができる日本兵は、何かと捕虜たちの待遇に文句をつける梶を「反動分子」と翻訳したため、梶は次第に追いつめられるようになったわけだ。ところが、本作が描くシベリアの矯正労働収容所の囚人たちは英語

を共通語としてコミュニケーションをはかっているから、そこに違和感がある。もっとも、これなら脱走の計画も立てやすいかも・・・。しかして、収容所の電気を供給するジュネレーターが切れる１０分間だけが絶好のチャンス。しかも今日は激しいブリザードだから、雪が足跡を消してくれる。さあ今が決行時！そう決断したのは「七人の侍」だったが、まず彼らが目指した方向は・・・？

■□■まずはバイカル湖へ！そしてモンゴルへ！■□■

『ウェイバック －脱出 6500km－』
９月８日(土)銀座シネパトスほか全国ロードショー
©2010Siberian Productions,LLC

なぜヤヌシュが「七人の侍」の脱走劇のリーダーになったのかが、本作前半の「人間劇」のポイントだから、そこはじっくり掘り下げてほしい。リーダーに要求される資質にはさまざまなものがあるが、ここで最も必要なものは、何が何でも脱出してやろうという脱出の意欲。梶上等兵が強制収容所を脱走して１人彷徨の旅を続けた目的は、ただ一つ最愛の妻美千子に会うためだったが、本作におけるヤヌシュは単に妻に会うためだけではなく、妻が一生背負わなければならない罪に対して赦しを与えるという目的があったから、その分だけ脱出の意欲が他の人より強かったかもしれない。そのためヤヌシュは、貯め込んでいる食料がまだ不十分、こんなブリザードでは進むべき方向が見えない、等々の「消極論」を抑えて、脱走は今こそ！と決行することができたわけだ。

リーダーをヤヌシュ、サブリーダーをスミスとする「七人の侍」は、前述したヴァルカとトマシュの他、ラトビア人の牧師ヴォス（グスタフ・スカルスガルド）、ポーランド人で夜盲症の若者カジク（セバスチャン・アーツェンドウスキ）、ユーゴ人の会計士ゾラン（ドラゴス・ブクル）だ。乏しい情報の中で、彼らが目指したのは、まず収容所の南方にある巨大な湖バイカル湖。バイカル湖まで至れば、それに沿って更に南下すれば、東西に走る鉄道に突きあたるから、その鉄道に沿って西に進めば、そこはモンゴルだ。モンゴルまで行くことができれば、共産ソ連からやっと脱出することができる。夜盲症のカジクを途中で失いながら、残りの６人はその一念でモンゴルまでたどり着いたが・・・。

■□■万里の長城へ！ゴビ砂漠へ！そしてチベットへ！■□■

日馬富士の横綱昇進によって、大相撲もやっと「２トップ体制」が成立したが、稀勢の里をはじめとする日本人大関のふがいなさにはゲンナリ。なぜモンゴル出身の力士たちが心も身体も強いのかというと、その原因は第２次世界大戦（日中戦争）終了後モンゴルが置かれた厳しい境遇にある、と私は思っている。第２次世界大戦後は、日本でも一時日本共産党が大躍進したが、北朝鮮やモンゴルでは中国とソ連の影響によって急速に社会主義

化が進んだことは周知のとおりだ。その結果、ヤヌシュたちが途中で合流した紅一点のイリーナ（シアーシャ・ローナン）と共にやっとの思いでモンゴルに到着した時、なんとそこにはスターリンの肖像が。

そんな現実の中、せっかくここまで逃亡しながらも、故郷ソ連への愛着を断ち切れないヴァルカを１人残して、次にヤヌシュたちが目指したのは万里の長城へ、ゴビ砂漠へ、そしてチベットへ、というとんでもない道だった。もちろん、その移動手段は自らの足だけだ。飛行機も列車も車もそして馬すらない状態で、しかも女連れで、そんな無謀な旅が成立するの？「ヤヌシュ様たち御一行」が異様な集団であることは一見して明らか、だから、官憲はもとより村人に発見されてもヤバイ。本作中盤は、そんな７人の旅をひたすら追っていく。美しい景色の中で描かれる旅の様子はそれなりに感動的だが、食料、薬、衣服、そして何よりも大切な履物等々の装備を含めて、何の支援もない状況でのこんな旅がホントに可能なの？そんなリアリティの面で、私にはこの大旅行に少し違和感が・・・。

■□■紅一点の参加には、もう少し工夫が・・・■□■

本作には、「七人の侍」の中に、ヴァルカという極悪非道の男が参加するのが１つのポイント。しかし、彼がそんな本性を見せるのは収容所の中までで、脱出行になってからは意外に善良。とりわけヤヌシュにリーダーとしての素質を認めてからは、チームワークを乱すこともなくなったから、これなら安心。しかし、そこに若い女が１人加わることになると・・・。なぜ女が１人こんな脱走者集団に加わることになったのかについてのイリーナの説明が二転三転するのは興味深いが、それでもなおこの紅一点の参加には少し違和感がある。また命懸けで雪の中をさまよい歩いている間は「変な欲」は出ないだろうが、タップリ食料や水があるところで休憩することにとなると、思わぬ男たちの欲が出てきてケンカになるのは容易に予想できる。ちなみに『人間の條件』でも、若き日の中村玉緒演ずる避難民少女が、一緒に逃亡している「兵隊さん」のえじきにされていたが、ヴァルカのような極悪非道な男がいれば、当然そんなトラブルも・・・。

ところが、私のそんな予想に沿った人間ドラマは本作には全く登場せず、ピーター・ウィアー監督はひたすら６人の男プラス１人の女の旅を追っていく。そんな姿を見ていると、ヤヌシュは当然梶上等兵と同じような禁欲主義者で、ただひたすら目的地を目指して歩く意志力の強い男だが、他の男たちも善良な男ばかりだということがよくわかる。すると、ピーター・ウィアー監督はよほどの理想主義者？イリーナが加わることによって映画的にはバリエーションが増えて面白みが増すのだが、紅一点の参加にはもう少し工夫が必要だったのでは。

■□■なぜヤヌシュはインドへ？それがちょっと・・・■□■

シベリアの収容所を脱出してから、バイカル湖、モンゴル、万里の長城、ゴビ砂漠、そしてチベットに至る徒歩だけの旅の途中に脱落者＝犠牲者が出たのは仕方ない。やっとチベットに入った時は、既にゴビ砂漠でイリーナを失い、さらに絵のうまかったトマシュも失ったから、「ヤヌシュ様たち御一行」はヤヌシュの他スミス、ゾラン、ヴォスの計４人に

なっていた。中国からの侵攻を受けたチベットの大変さは、ブラッド・ピットが主演した『セブン・イヤーズ・イン・チベット』（９７年）等を観ればよくわかるが、さらに本作を観れば仏教国であるチベットの人々の優しさや温かさを十分感じとることができる。

『ウェイバック －脱出 6500km－』
９月８日(土)銀座シネパトスほか全国ロードショー
©2010Siberian Productions,LLC

そんなチベットまで来たら、ヤヌシュたち４人はみな安心。つまり、逮捕されたり、ソ連へ送還される恐れはなくなったわけだから、ここでヤヌシュはポーランドの情勢を静かに見守ればいい。私はそう思ったのだが、なぜかヤヌシュはここからさらにインドまで行くことに固執していた。一体それはなぜ？

他方、生死をさまよう状態でやっとチベットにたどり着いたスミスはさすがに少し疲れたのか、ここから中国に入りアメリカ軍に合流すると言い始めたから、これには私も納得。すると、後の２人、ゾランとヴォスはどうするの？本作は、ある日ヤヌシュが１人でインドに向かい始めたことを知ったゾランとヴォスがこれを追い、結局３人でインドまで至る６５００ｋｍの旅を完成させたことを報告し、さらにその数十年後にヤヌシュがポーランドに戻り、妻と感動的な再会をなしとげたというエピソードで終わる。たしかにそれはそれで感動的なストーリーだが、ヤヌシュはなぜチベットからさらにインドへ？私にはそれがちょっと・・・？

■□■「あの戦争」後の歴史の勉強をしっかりと■□■

「あの戦争」終了後、日本は奇跡的な復興を遂げたが、同じ敗戦国であるドイツは東西に分断され、大きな辛酸をなめた。それに対してポーランドは？本作がラストの字幕でまとめる、「あの戦争」以降のポーランドの歴史は次のようなものだ。すなわち

①１９４５年5月８日　ナチス・ドイツが無条件降伏
②１９４５年～４８年　ソ連によるポーランド侵攻、共産化
③１９５６年　ハンガリー動乱
④１９６１年　ベルリンの壁建設
⑤１９６８年　チェコスロバキアにおけるプラハの春、ソ連率いるワルシャワ条約機構軍によるチェコにおけるチェコ事件
⑥１９８０年　ポーランド民主化
⑦１９８９年　ベルリンの壁崩壊、ポーランドは自由に

はるか遠くの地とはいえ、日本人もこれをしっかり学ぶ必要がある。すると、妻との感動的な再会を果たした時のヤヌシュの年齢は・・・？

２０１２（平成２４）年１０月１６日記